

今泉吉晴さん

(動物学者・翻訳家)

自然に関わり、生きるというひとつなぜソローとシートンを読むのか(下)

東日本震災以降、自然と科学の調和は重い課題として日本に突きつけられた。実は、そのことに示唆を投げかけてくれている先達がいる。ヘンリー・ロ・ソロー(一八一七〜一八六二)と、アーネスト・T・シートン(一八六〇〜一九四六)。動物学者であり翻訳家でもある今泉吉晴さんに、彼らの「自然との共生の知恵」について聞いた。

詩人の科学、ソローとシートン

——今泉さんにとって、ソローとシートンはどんな存在ですか？

子供の自然への憧れのまま学び続けたい——。優れた科学者がいう科学論になじめない私の導きの書が、ソローとシートンの作品です。

ソローは大学を卒業するとき、「僕は一週間を、みんなと逆に生きてみせる。みんなは六日間働いて一日休む。でも僕は六日間遊んで一日働く」と宣言します

歩がそれです。

ウォールデン池を丘の上から見ると、ミズスマシが立てるさざ波を見てとれる。この微細な動きを美しいと感じとる心を、なぜ人間は持っているのか。ソローはその意味を考えます、彼の言う「今を生きる詩人の科学」です。

——今日科学だと思われるものからすると、ずっと人間味にあふれていますね。

そうですね。ソローもシートンもナチュラリストで、ナチュラリストは自然とつながる自分の回路を持っています。その回路を通



取材当日、100年以上も前に刊行されたシートンの著作など、たくさんの貴重な資料をお持ちくださった今泉吉晴さん

(笑)。七年たつて故郷コンコードの森に入り、家を建て、畑をつくつて暮らします。卒業宣言が実行できるものであることを、検証するためでした。そして、二十九歳で『ウォールデン 森の生活』を書くのですが、本の全体が実験報告です。

ソローはなにごとにも逆説的です。富をより多く生産し消費することを、美德と豊かさの指標にするアダム・スミスの『国富論』を貧しい考えと断定します。そして、自然こそが人間の本性を引き出す、と主張し、実際ソローは一週間のうち六日の余暇を自然と共に生きて、自分を育てる時間にあてます。毎日四時間の散

して自然とつきあう楽しみを知り、その楽しみからさらに自然を知ります。科学者は自然と切れていることに違和感を持たない。そこで、原発事故が典型ですが、自然に対して責任を感じないようです。

十九歳で『ウォールデン 森の生活』に出合ったシートンは、ソローの「詩人の科学」を知り感動します。そしてイギリスのロイヤルアカデミーという画家の道を保証する美術大学の七年の特待生の身分を捨て、カナダに帰ります。ソローのように経済的に自立したナチュラリストになるためです。

『ウォールデン 森の生活』に登場する、動物をよく知る猟師になろうと、一八八二年マントバ州カーベリーの開拓地に入ります。そして、近くのサンドヒルにすむシカの足跡を何百マイルと追います。追われるシカの心を思ううちに、シートンはシカに共感していく自分を自覚します。

三年後、シートンはシカを追って自分が成長した一方で、シカも知恵をつけたと知ります、自分たちは共に育った兄弟、と考えたシートンは、追いつめたシカを撃てません。こうしてシートンは、動物を殺さない動物学を確立していきます。